国際医療福祉大学審査学位論文（博士）
２０２０年度大学院医療福祉学研究科博士課程・論文発表会用抄録

題目：DV 加害者の自己主張抑制の特徴について：一般成人男性との比較から

保健医療学専攻・臨床心理学分野
学籍番号：１８Ｓ３０１７　　氏名：喜多村 真紀
研究指導教員：小畠 秀吾 准教授　　副研究指導教員：鹿島 晴雄　教授

キーワード：ドメスティック・バイオレンス　加害者　自己主張抑制　支配構造

1.　研究の背景と目的

2001 年に配偶者からの暴力防止および被害者保護等に関する法律が施行され、ドメスティックバイオレンス（以下、DV と記す）被害者へは保護ならびに情報提供等の支援がなされている。一方、加害者に対する加害行為の防止や抑制に関して公的なシステムはほとんど存在せず、民間団体による教育プログラムが実施されてはいるものの未だ不十分であるといえる。

加害者に関する先行研究では、身体的暴力の増加への影響因として加害者のコミュニケーションの問題が指摘されている。他者との円滑なコミュニケーションには自己主張が関連しており、DV 加害者における妻や交際相手など親密な関係性および社会的関係性での自己主張得点と一般男性の各得点とを比較したところ、DV 加害者の方が有意に低い結果であった。

また、DV 加害者は社会的関係では粗暴さは認められず、妻らに対してのみ高圧的、支配的であるといった二面性を臨床家らが指摘しているものの、関係性の差異による自己主張抑制傾向に関する実証的研究は見当たらない。DV 加害者の自己主張抑制傾向および影響因を明らかにすることは、わが国における DV の支配構造の特徴について検討を可能にする。そこで本研究では DV 加害者の自己主張の抑制要因として関係性が持つ影響について非 DV 群との比較から明らかにしたいと考えた。

2.　研究方法

質問紙は 2019 年 11 月から 2020 年 2 月にかけて配布した。DV 加害教育プログラム受講中の男性 26 名を研究対象群とした。比較対照群は北海道、関東、中部地方在住の一般成人男性を対象に 200 部をスノーボールサンプリングにて配布し、回答を得られた 124 名であった。この内、質問紙で提示した DV 加害行為について、過去に妻らから指摘された経験のない 86 名のデータを非 DV 群として分析に用いた。基本属性（年齢、婚姻または状況、最長の婚姻または交際期間、最終学歴、雇用形態、妻らとの学歴および収入の比較、子どもの有無および人数）、自己主張抑制尺度（32 項目,4 件法）および自己愛的甘え尺度（「配慮の要求」「許容への過度な期待」「屈折的甘え」，5 件法）を用いて各傾向を測定した。ただし、自己愛的甘え尺度の「配慮の要求」は夫婦などの親密な関係間と友人関係や職場など社会的関係といった関係性による差異を検討するために「妻らへの配慮の要求」「社会的場面での配慮の要求」の 2 場面を設定し、あわせて 4 因子として回答を求めた。

3.　倫理上の配慮

本研究は国際医療福祉大学大学院倫理審査委員会の承認（19-Ig‐110）を得て実施した。

4.　結果

基本属性の内、有意差の認められた項目は子どもの数のみで、平均値は DV 群で 1.5 人、非 DV 群で 1.9 人であった。DV 群が指摘された経験を有する項目の内、半数を超えるのは自責感を持たせる（76.9%）、態度での脅迫（76.9%）、独断的決定（69.2%）、身体的暴力（53.8%）であった。自

己主張抑制尺度平均点はDV群の方が非DV群よりも有意に高かった。項目ごとに平均点の差の検定を実施したところ、5項目が有意に高かった。また、自己愛的甘え尺度の因子のうち、「妻らへの配慮の要求」「社会的関係での配慮の要求」「屈折的甘え」の得点はDV群が有意に高かった。自己愛的甘え尺度における因子間相関については、2群ともに「妻らへの配慮の要求」と「社会的場面での配慮の要求」の間に相関が認められた。DV群にのみ、「社会的場面での配慮の要求」と「屈折的甘え」および「許容への過度な期待」と「屈折的甘え」の間に相関がみられ、非DV群にのみ「社会的場面での配慮の要求」と「許容への期待」に相関があった。

自己主張抑制尺度得点を目的変数、自己愛的甘え尺度の4因子各得点を説明変数として多母集団同時分析による重回帰分析を実施したところ、2群ともに「屈折的甘え」から正のパスがみられた。一方、DV群にのみ「妻らへの配慮の要求」から正のパス、「社会的場面での配慮の要求」は負のパスが認められた。

5. 考察

スノーボールサンプリングによって得た非DV群の基本属性データと比較した結果、2群に大きな差異は認められず、本研究のDV群はわが国の成人男性から大きく偏った集団であるとはいえない。

自己主張抑制尺度平均点の比較からDV群は非DV群よりも、自己主張の抑制傾向が認められた。項目毎に比較し、平均点に有意な高さがみられた5項目からは、DV群は自己の感情や対人緊張を他者からどのように捉えられるかが気にかかり、自己開示が抑制されるものと考えられた。自己愛的甘え尺度平均得点の比較では、DV群は非DV群よりも、親密関係および社会的関係にある他者に対して、自己主張しなくても注目・称賛されるべきという意識を持つ傾向が高いと示唆された。また、自己の欲求が充足されない場合、その欲求は一方的で歪んだ形態を示しやすいといえる。

両群とも「屈折的甘え」からのパスが認められ、素直に甘えられないことが自己主張の抑制に影響することが示された。DV群においてのみ認められたパスからは、社会的関係では言わなくてもわかるだろうという期待やそうあるべきだという信念は自己主張を促進するが、親密な関係における対人期待は自己主張を抑制することが示唆された。これは、社会的場面では「わざわざ言わなくてもわかるはずのことがわからない相手には明確に主張する」が、妻らに対しては「わざわざ言わなくても自分の要求をくみ取るべきだから言わない」という解釈を可能とし、加害者における関係性の差異による異質性が示され、臨床家らの指摘を支持する結果であった。

6. 結語

DV加害者におけるコミュニケーションの問題として、一般成人男性に比して自己主張を抑制する傾向があり、特に妻らの近しい関係間では配慮への期待の影響が明らかとなった。また、社会的関係での態度傾向には差異が認められた。研究結果から考えられるDV加害行為に含有される支配システムとは、自己のハイ・コンテクストな言動から要求を読み解くことを被害者に迫り、暗黙の裡に身体的、精神的、経済的、性的な自己決定性を強奪していくことではなかろうか。このような被支配の結果として、被害者は自己決定性を喪失している可能性に配慮した支援が肝要であろう。

本研究の研究対象者は少なからず自己の加害性を認識した上で教育プログラムを受講する者であり、本研究の議論はDV加害者全般を規定するものではない。また、比較対照群においても、妻らからのDV行為指摘経験を持たないことが加害行為の無い群である確証とはならない。このような限界はあるものの、本研究は本邦のDV加害者の自己主張の特徴を数量的・実証的に明らかにしたわが国初の研究であり、DV加害の支配構造の検討を可能とする臨床的意義がある。今後、さらに広範な加害者を対象とした比較調査が望まれる。